

令和 4 年 10 月 16 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16915

研究課題名（和文）1920年代ハイデルベルク大学との学術交流の実態研究

研究課題名（英文）Investigation into the real situation about academic interaction between Heidelberg University and Japan in the 1920s

研究代表者

久野 譲太郎（KUNO, Jotaro）

同志社大学・人文科学研究所・嘱託研究員

研究者番号：10755391

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代日本の学知形成に多大な影響を与えたとされながらも、従来全く顧みられることのなかった、ドイツ、ハイデルベルク大学との学術交流の実態を解明した。とりわけ本研究では、最も多くの知識人が留学したと言われる、ヴァイマル期に焦点を当てて解明した。これにより、これまで存在さえ知られていなかった当地に残る多くの日本人知識人たちの資料が収集・整理されるとともに、これを通じて大正期以降の日本の学知形成過程と性格に関する新たな側面を解明するための基礎的データと条件が整った。現在、これらの具体的成果は研究論考および、全在籍者名簿と現存資料についての総合目録として作成、公開されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

周知のように、近代日本にとりドイツは永く文化や思想の輸入元であった。なかでも大正期には、人文・社会科学の基礎づけや思想形成に対して極めて大きな役割を果たし、それは現代に連なる文化の重要なルーツをなしている。そしてその際、ベルリンと並び文化交流の中心を担った都市こそがハイデルベルクであった。事実この時期多数の知識人が当地に学び様々な学問や思想を吸収している。

それにも関わらず従来その実態は全く知られていなかった。そのため、本研究の成果は、近代日本の思想・文化の形成過程や性格についての新たな知見を提示し、ひいては現代社会と文化のあり方を歴史的に問い直す点で重要な学術的かつ社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：I clarified real situation for academic interaction with Heidelberg University in Germany which had a lot of influence upon the development of learning and thought of modern Japan in this research. Above all, I clarified real situation in Weimar era when the most Japanese intellectuals went to Heidelberg to study.

As a result of this research, the materials of many Japanese intellectuals whose existence was unknown were collected and put in order. And through this research, basic data and conditions to clarify a new aspect about the process of the formation of learning and thought and nature of Japan from the Taisho era were ready. These specific results were already as a paper and a general catalog of materials and Names-list made public.

研究分野：近代日本思想史

キーワード：ハイデルベルク大学 ヴァイマル期 1920年代 日独学術・文化交流 留学史

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初における背景は、これまでの歴史学や思想史が、近代日本の思想的見取り図を、部分的な文化接触論の上のみ立脚して描いてきたことへの疑義があった。

周知のとおり近代日本はドイツから多くの制度や学術を移植しつつ近代化を達成しており、日本の学知・思想形成や文化振興に対してもドイツの学問・思想は多大な影響を与えている。しかもこうした影響は時代や地域によって特色を異にする多様性を有するものであった。そのため、かかるドイツとの交流が有するその多様性や影響関係を精密かつ多面的に把握しなければ、現代にまで連なる近代日本の文化や思想構造、その特質と問題点を正確に理解することはできない。

しかしそれにも関わらず、これまでの日独交流史研究では、専ら明治期を中心とした首都ベルリンとの交流に焦点が当たり、その他の年代や諸都市との交流についてはほとんど研究の蓄積がない状態にある。したがって、こうした研究に立脚して描かれてきた近代日本の思想史像もまたそれは必然的に一面的な性格を持たざるをえなかったといえよう。そのため、近代日本の思想・文化構造や多様性を精密に描くためには、明治期ベルリン以外の年代や重要な都市との交流の実態にも光を当て、主題的な研究を展開する必要性があったのである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、ベルリンとならんで大正期以降の日本の学知・思想形成に多大な影響を与えたとされながらも、従来はまったく顧みられることのなかった、ヴァイマル期ハイデルベルク大学との学術交流の実態を実証的に解明することである。またさらにはこれを通じて近代日本の学知形成過程や思想的特質をあらためて思想史的に問い直すための基礎的データと条件を整備することである。

### 3. 研究の方法

本研究ではまずなにより、従来ほぼ未発掘・未認知のままハイデルベルク大学公文書館に保存されているヴァイマル期(1919年～1933年)ハイデルベルク大学への全日本人留学生(日本人知識人)の資料を、現地にて網羅的に調査・収集することをおこなう。そしてこの調査を通じて、当時期、当大学への日本からの留学の規模とその推移、また性格等、実態と全容を統計的かつ実証的に解明することをおこなう。なお、この際、同時に、収集した全日本人学生の資料整理・目録作成をおこない、資料の保存状況と歴史的価値を明らかにする。

またこの調査・研究成果を適宜ベルリン大学等の事例とも比較することで当時期ハイデルベルク留学が有した特色と歴史的意義についても浮き彫りにする。

さらにそのうえで、こうした当時の日本人留学生たちのなかから、とりわけ著名な知識人数名を抽出し、現地にて収集した資料と日本に残る著作や資料を総合的に用いることで、留学時代の動向ならびにその思想や学説の留学を通じた形成・変化について紹介・検討する。これにより当時留学生たちへの当地留学の具体的な影響について動態的・思想的に解明する。なお、加えて、当時の留学生たちが機縁となって逆に渡日し、日本で活動した著名なドイツ人知識人の日本での動向と思想についても補説することとする。これによって学術交流の双方向性についても明らかにする。

以上を通じて、1920年代を中心としたヴァイマル期におけるハイデルベルク大学との学術交流の実態と全容、その思想史的影響を総合的に解明する。

### 4. 研究成果

本研究では、第一に、ハイデルベルク大学公文書館に保存される全日本人留学生関係資料のなかから、ヴァイマル期における留学生資料の網羅的収集と綿密な調査解明をおこない、その正確な実態を明らかにした。従来、数多くの日本人が当時期のハイデルベルクに学んだと指摘はされていたが、実際には、ハイデルベルク大学のヴォルフガング・ザイフェルトらによる簡単な調査以外には、その詳しい数値や実態は不明のままであった。そのためこの研究により初めてその正確な規模と性格が解明された。

まず、その留学者数に関して言えば、その数は当時の留学としては非常に大きく、例えばベルリンやライプツィヒ、ミュンヘンなど同時期の他大学と比較した場合でも、ベルリンを除く他大学に比して、きわめて大きな数値であったことがわかった。ただしここで重要な点は、こうした単純な入学者数の数値よりはむしろ、ヴァイマル期以前の時期、つまり帝政期あるいは明治期と比べた場合の留学者数の急激な増加率である。すなわち、他大学ではそれ以前と比べて入学者数に変動がないかあるいは多くの場合には減少しているのに対して、ひとりハイデルベルク大学への留学率のみはこの時期激増しており、ここに当大学が有する特徴も強く見られたのである。

そのため、本研究では次にその急増の歴史的背景を順次追尋した。その結果、その理由には主として教育政策上の理由や経済上の理由など4つの原因が働いていたことが明らかとなったが、なかでも、当時日本の思想界・学界における「新カント派」の流行が留学生急増の大きな理由をなしていたという事実がここであらためて確認されるにいたった。

しかもこの点をめぐって、今回の調査で確認された重要な点は、かかる新カント派による影響が、決して狭く哲学や思想分野には留まらず、経済学や法学のような社会科学分野に対してまでも広く及んでいたということである。それは今回その属性を含めて全貌を明らかとした全日本人留学生の一覧のなかに、哲学専修学生について、きわめて多数の社会科学専修学生が含まれていたという統計的事実からも裏づけられる。さらに言えば、これら留学生のなかには、

その後の日本の学界や思想界をリードすることになる多くの社会学者たちの姿を見出すことができるのである。これはまさしく、新カント派が当時日本の社会科学の発展に対しても非常に大きな役割を演じていたことを意味するものであり、したがって、新カント派と近代日本の関係を考えるにあたって、これまでのように単に哲学や思想面からのみならず、社会科学との関係でも把え直すことの必要性を提起するものである。

なお、そのため本研究ではその手始めに、ひとつのケーススタディーとして、当時ハイデルベルクに学んだ知識人の一人であり、戦前戦後を代表する法学者（法哲学者）である恒藤恭に焦点を当て、現地に残る資料をも発掘しつつ、その動向と思想推移を追跡することも試みた。その結果、恒藤が当時の激動する時代状況を見据えるなかで、新カント派に依然立脚し留目をしつつも、しかし同時に、留学を通じて新たな時代の思想にも注目し、主体的立場から新カント派を乗り越え、独自の法理論を模索してゆくという、その思想形成過程の様子が、本人の受講記録等から浮かび上がった。したがって今後はこのように、多くの留学生個々人が、当地留学を通じていかなる知的経験をし、またその過程でいかに新カント派と向き合ったのか、そのプロセスの思想史的研究を本格的に展開することによって、ヴァイマル期ハイデルベルク大学との学術交流が近代日本の学知形成に対して有した歴史的意義と役割を、両国の社会背景ならびに知的文脈のなかでより総合的かつ動態的に解明してゆく必要があるであろう。本研究の成果とはなにより、こうした思想史的研究を遂行するにあたって必須となる前提と条件をはじめて整えたことにある。

ちなみに、以上の具体的な主要研究成果として、ケーススタディーである恒藤の具体的動向に関しては日本側の研究紀要に「ハイデルベルクにおける恒藤恭の修学と生活 - 在現地・新資料の紹介をかねて - 」を執筆するとともに、また当時留学の全体像の概観については、ハイデルベルク大学側のオンライン学術雑誌に「ヴァイマル期ハイデルベルク大学への日本からの留学状況とその歴史的背景」を掲載した。さらに、これに加筆修正を加えた論考を「解説」として添えつつ、当時全日本人留学生およびその現存資料についての詳細な情報を掲載した、より精確で網羅的な総合目録である『ヴァイマル期ハイデルベルク大学の日本人留学生 在籍者名簿および現存資料目録』を作成し、日独境の関連研究機関に配布した。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

久野譲太郎、「ハイデルベルクにおける恒藤恭の修学と生活-在現地・新資料の紹介をかねて-」、『大阪市立大学史紀要』11号、大阪市立大学大学史資料室、2018年、査読無、pp.41-59

久野譲太郎、「ヴァイマル期ハイデルベルク大学への日本からの留学状況とその歴史的背景」、『Bunron.Zeitschrift fuer literaturwissenschaftliche Japanforschung』8号、2021年、査読有、pp.230-274

( <https://hasp.uni-heidelberg.de/journals/bunron/article/view/15528> )

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

《総合目録》

久野譲太郎『ヴァイマル期ハイデルベルク大学の日本人留学生 在籍者名簿および現存資料  
目録』2022年、を作成のうえ、日本、ドイツ、オーストリアの関連研究機関に配布

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。